

## 四才児三学期の記録

(2)

子 子 眞  
景 文  
部 合 守  
磯 堀 津

棚におもちゃをかぎって子どもたちがつくったおもちゃで、おもちゃやごっこがはじまう盛になる。子どもたちはそれぞれつくりたいものがあって次々と先生に言ってくる。先生は子どもたちがつくりたいと思っている気持ちが満足できるように、子どもたちといっしょに考えていっしょにつくっていた。たとえば洋服だんすをつくるというってつくりはじめ、箱のまわりだけ色をぬってできたといっている子どもに、ひごを用意して、洋服かけができるようにしたりというようなことが多くみられた。

二月一日 土曜日

楽隊あそび

電車事故のため朝先生はいない。

子どもたちは積み木、ままごと、自分の画帳に絵をかいたり、廊下でリレーをしている。

遊戯室でお母さんたちの会合が始まる。

先生にいわれてみんな保育室に入る。先生のピアノに合わせて、小さい積み木やくみ木

の棒でリズムをとり「むすんでひらいて」「信号のうた」「かくれんぼ」などをする。子どもたちは「積み木の楽隊だ」とよろこぶ。次に持っている積み木やくみ木の棒をたたきながら、曲に合わせて歩く。

(註) 一月二十八日昼食後Kたちが積み木をたたきながら楽隊だといっていた。先生はそれを見て、レコードをかけて、先生も仲間になって保育室と廊下をぐるぐる行進した。次第に人数が多くなってクラスの半数くらいの子どもが加わったことがあった。

二月三日 月曜日

節分のお面づくり。

朝から一部の子どもが先生のまわりでお面をつくっていた。

二月四日 火曜日

豆まきをする。

昨日お面を作らなかった子どもたちが、今日は朝からお面を作っている。みんなが作り終ってお面を持って遊戯室に行く。リズムあそびは先週の火曜日のつづきで、「おにのおどり」や、「豆のおどり」をする。お面をかぶって、ピアノに合わせて、自由にあちこちおどりまわる。次に先生が、ますを持ったかっこうをして、ぱつとまくと子どもたちは豆になって、ころがったりしながら、おどり出す。

保育室に帰り豆を入れる箱を曲用紙でつくる。はやい子どもは十

五分くらいでつくる。Sは二十五分でつくる。十センチ四方高さ三センチくらい箱をつくるのだが、箱のまわりに模様をかいて、のりつけをしてでき上る。遊戯室から保育室に帰るや、庭に出て遊んでいる子どももいる。先生は「お豆を入れるますをつくって下さいな」ときそう。ますができ上ると、先生に豆を入れてもらって庭に出て行く。じきに「先生、なくなっちゃった」と帰ってくる。先生は「二度だけね。みんなにわけるのだから。あまったらまたあげますからね」という。庭にでた子どもは、あてもなく豆をなげている。ほとんどの子どもは豆を捨うのにいっしょうけんめいになっている。子どもたちがみんな箱をつくり終った頃、先生が鬼のお面をかぶって保育室から庭へ出てくる。そしてあちこち、走ってにげる。子どもたちは、先生の鬼に豆をなげたり、追っかけたりする。先生が庭に出てから、子どもたちが、がぜん活発になってくる。豆が少なくなったのか、先生のまねがしたくなったのか、保育室に入り、自分のひき出しからお面を出してかぶってくる子どもが多くなる。こんどは先生が豆まきにかわる。子どもたちは「キャッ キャッ」といながら逃げる。写真屋さんに写真をうつしてもらった時、「いばった鬼さんも、かわいい鬼さんもいるわね」と先生にいわれて、子どもたちはいろいろなポーズをとる。

二月五日 水曜日

シーソー、戦車、自動車、パーカー、ロボット、たんす、ままこ

とセットができる。

先生のまわりで女兒がシーソーをつくっている。Rはさっきからシーソーをつくっている子どもたちをみている。先生は「Rちゃんは何つくるの」とときく。「シーソー」「それじゃ箱をさがしていらっしやい」という。Mが「電車ができた」と持つてくる。先生はMの電車をみて、「窓をあげたいですね。この紙はやわらかいからはさみできいたらどうかしら」という。Mは長い時間かかって、四面のうち、一面だけきる。先生は「前にも窓があつて、運転手さんがみえるようにするといいわね」という。Mはまたつづけて、窓をきる。窓をきりながら「この次は戦車だ」という。先生は「いろいろと考えていいわね」という。

二月七日

首かざり、うでわ、絵あわせ、ままごとセット、洋服だんすができる。

午前中、首かざり、うでわ、絵あわせなどのおもちゃづくりが盛であった。そのほかままごとセットやお人形をつくっていた子どももいる。男児八人が箱積み木で大きな航空母艦をつくる。そしてロケット型のプラスチックや組み木で飛行機をつくり、航空母艦から発着させて非常に楽しそうに遊んでいた。十一時頃おもちゃづくりをおえた女兒たちが、人形芝居をはじめ。うでわ、絵あわせは皆、だいたい同じようなつくり方をしていたが、首かざりには次の

種類がみられた。

ヨーグルトのふたに模様をつけてモールを通して輪にもる。輪つなぎを五、六個作つてそれをまとめてかざりにして、モールを通す。

色紙を小さく模様は切つて、ビニール製のストローも三センチくらいに長さにする。そして色紙をストローと交互にひもにとおして輪にする。

細長い色紙を長くはり合わせて輪にする。

二月八日 土曜日

男児はきのうのつづきで航空母艦をつくつて戦争ごっこをする。おもちゃでは、飛行機、ロケット、洋服だんす、絵あわせなどができる。子どもたちがさかんにおもちゃを売り買ひしてあそぶ。遊んでいるうちに「足りないもの思ひついた」といっておもちゃをつくりはじめた子どももいる。帰る時先生が「今日はおみせやさんがおもしろかったわね」と子どもたちにはなす。

二月十一日 火曜日

さかんにおもちゃやごっこをする。机二脚がおもちゃの陳列棚になっている。おもちゃにそれぞれ値段がついている。午前中、いつもだれかが店の人になって、おもちゃが盛に売られる。買ったおもちゃはしばらくすると返しに

くる。

二月十二日 水曜日

おもちゃがまごとおそびと関連をもつ。

男児十一人が飛行場をつくっている。

Mは食料品のセットをつくっている。先生はおもちゃやにだれもないのをみて、「あらお店にだれもいませんね。いらっしやい。いらっしやい」と店の人になる。

MとHもきて売りはじめ。まごとおそびをしていたSたちが、買いくる。TとYは、ごぎをひいて、お米屋をはじめ。Sたちはお米も買いくる。

二月十四日 金曜日

誕生会のおやつを入れるかごをつくる。

男児たちは今日も飛行場をつくっている。

二月二十一日 金曜日

実習生の研究保育の日で、先生は他のクラスに行ったりして、保育室では先生の姿が、みえない。机の上におもちゃが並べてあるが子どもたちはだれも関心を示さないようだ。男児は、くみ木で飛行機をつくって、箱のつみ木で空港をつくる。次第に人数が多くなり、別の場所にもうひとつ空港をつくる。子どもたちは第一空港、第二

空港といつてつくった飛行機を並べる。第二空港から第一空港へ競争を申しこみ、戦争ごっこをはじめ。しばらくすると日本軍とイギリス軍になっていく。その他ブロックで大きいビルディングや高速道路をつくる。戦争ごっこにあきて、画帳を自分のひき出しから出してきて絵をかきはじめるが、飛行機をかいている子どもが多い。そして、飛行機のことを夢中になってはなしている。女兒は、遊戯室でボールで遊んだり、画帳に絵をかいたり、あやとりをしていた。

二月二十二日 土曜日

昨日にひきつづき、実習生の研究保育の日。

二月二十四日 月曜日

おもちゃや開店の準備、看板やのれんをつくり案内状をかく。

いよいよ明日、幼稚園中の人をまねいて「おもちゃや」を開くことになる。朝からの様子を記録でおってみよう。

男児三人、女兒ふたり、保育室の片すみで絵本を読んでいる。男児五人小さい積み木でお城をつくっている。

女兒ふたりまごとコトナーでまりを手を持ってなぞなぞおそびをしている。

④「あるけどないもの、ないもの、なかに」

㊦ 「なし」

㊧ 「それじゃね。道に白いくつをはいて立っているもの、なあに」

㊨ 「郵便ホスト」

㊩ 「つよいけど、つよくないもの、なあに」

㊪ 「勇気」

㊫ 「切っても、切ってもきれないもの、なあに」

㊬ 「お水。お湯」

音楽が流れてくる。男児三人保育室を歩いていたが、レコードの音をきいて

A 「体操だ」

と、A が体操をはじめると他のふたりもA の方をみながら、A がいろいろな動作をするのをまねする。あたりかまわず、しばらく体操をする。

先生が保育室に入ってくる。小さい積み木でお城をつくっているのを見て、

先生 「あら、これいいわね」

A 「お城をつくっているんだよ」

男児五人箱積み木を運んできて、かこいをつくりはじめる。

先生が縦五十センチ。横一メートルくらいのわくを持ってくる。そしてそのわくに紙をはりはじめる。おもちゃの看板をつくれるように準備をする。

箱積み木のかこいが四段くらいになったとき、小さい積み木をやっている子どもが見に来る。

Y 「やっぱり、こっちがいい」

と行ってまたお城のところに行きつくりつづける。

T が先生のところに来て、先生とはなしている。

T 「たいへんだ、これおもちゃさんの看板だって」

と保育室にいる子どもたちについてあるく。

先生 「そうだ、T ちゃんたちお手紙をつくって下さい」

先生は机のところに紙をとりに行く。

先生 「幼稚園に六つ組があるでしょう。皆で八枚。そうだわ。自分の組のはいらぬわね」

と子どもたちに手紙をかく紙をわたす。

先生は包み紙を机にひろげる。子どもたちは机のまわりにすわる。

先生 「それじゃ絵をかく人と字を書く人に分かれてね」

子どもたち 「絵をかく。絵をかく。絵をかく」

と調子を楽しんでいつまでもいい続ける。先生は黒板に「おもちゃやをひらきます。はやしのくみ」とかく。



先生「あれをわいてちょうだい。まねをして。ふたりでいっしょにかいてもいいわよ」

子どもたちはかきはじめる。遊んでいた子どもが、みにくる。

先生「あっそうだわ。絵をかく人がすわれないわね」と、もう一つの机の上に包み紙をひろげる。

先生「絵をかく人、こっちでわいてもいいわよ」

先生はおもちゃののれんをつくるため模造紙を切りはじめる。

Yが先生のところに案内状の絵をみせにくる。

先生「戸棚があつたり、飛行機があつたりしてとてもいいわ」

次々と子どもたちが先生に案内状の絵をみせにくる。先生は絵の具をときはじめる。

先生「㊤ちゃんたちも手伝って下さい」

先生はのれんにする紙を机の上にひろげてる。のれんはピンクと白の交互のしまにして、白のところに子どもたちに絵を書かせることにする。先生は、白いしまにあたる部分を鉛筆でしるしをつけて、子どもたちひとりずつに絵をかく部分を知らせる。

先生「お人形さんでも、自動車でも、何でもいいわ」

㊤「お花でも」

先生「ええ。ええ。お花でもいいわよ」

先生はもう一枚ののれんの紙には、ピンクのしまにあたる部分を子どもたちにはなして、絵の具を持ってきてぬらせる。

保育室の片すみでは「たご焼き」がはじまる。

O「いらっしやい。いらっしやい」

Y「いらっしやい。いらっしやい。たご焼きはいかが」

お城をつくっていた子どもたち

E「買ってくるな」といって買いに行く。

E「たごやきをくれ」

O「お金をくれ」

Y「ひとつ十円」

E 「はいお金」

O 「ねえ、ちょっと、お金はブロックだよ」

E 「はい、お札、お札」

O 「お札はいいよ」

先生は次に④たちに看板に「おもちゃや」とかかせる。前もって、鉛筆で場所をきめておく。そしてまわりに絵をかかせる。

昼食後、食べ終わった人から、遊びに行く。先生はできたのれんを棚につける。レコードがなり、幼稚園中で体操がはじまる。体操が終り、庭を行進して、保育室に入ってくる。

みんなで棚におもちゃを並べる

先生「こわれているおもちゃはあした修ぜんしますから、あの箱に入れておいてね」

みんな大よろこびで棚におもちゃを並べる。看板の絵をながめている子どももいる。

先生は看板の「おもちゃや」の文字を黒えのぐで一字ずつまるでかこむ。子どもたちはおもちゃを並べ終り帰る仕度をする。

先生のピアノに合わせて「やっこやっこやっこくりだした」とおもちゃのマーチをうたう。

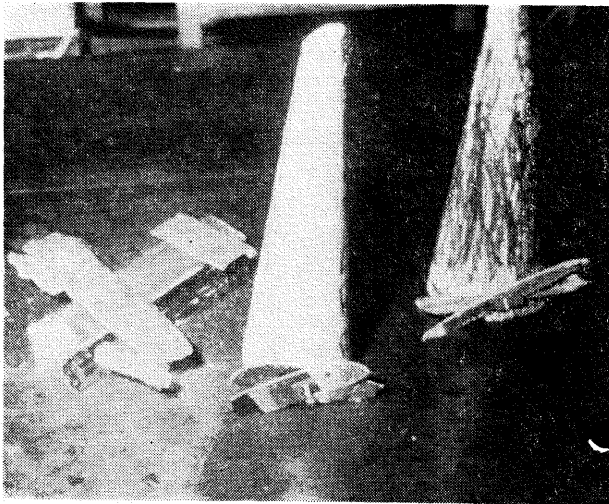
先生「おもちゃやさんだいができたわね。あしたみんなとおやくそくしたおもちゃやさんをしましょうね。今日は、お手紙もかいだし、あしたは、きれいにかざって買いにきて下さるのをまち

ましようね。あしたは、こわれたおもちゃの修ぜんをしましょうね。どうやってかざるかよく考えておいてね」

二月二十五日 火曜日

雪だるまをつくる

昨夜から雪がふりつもあり、あたり一面まっ白である。先生は子ど



ひこうきと風車

ものいすにすわって、おもちゃを修理している。本をみている子どもも、遊戯室に行つて鬼ごっこをしている子どももいる。

先生「あのね、自分のおもちゃこわれていないかみていらっしやい」

⑩「たちが、先生のまわりに座つて、おもちゃの修理をしている。先生「⑪ちゃんの洋服だんすの中の洋服ちゃんとなつてるかしら」と何もしていない子どもにいう。

先生はおもちゃをきれいに並べはじめる。

⑫「せんせい、おかねつくるの」

先生「ちよつとまつてね」と紙を出しに行く。

M「私たちはつくりかけの電車で色をぬっている」

⑬「ハバつたらねえ、こんなことしているのよ」

M「できた」

⑭「ハバのところはのびしてやるとできないって」

M「先生、できました」

⑮「オレンジ色みたいね」

⑯「オレンジジュース」

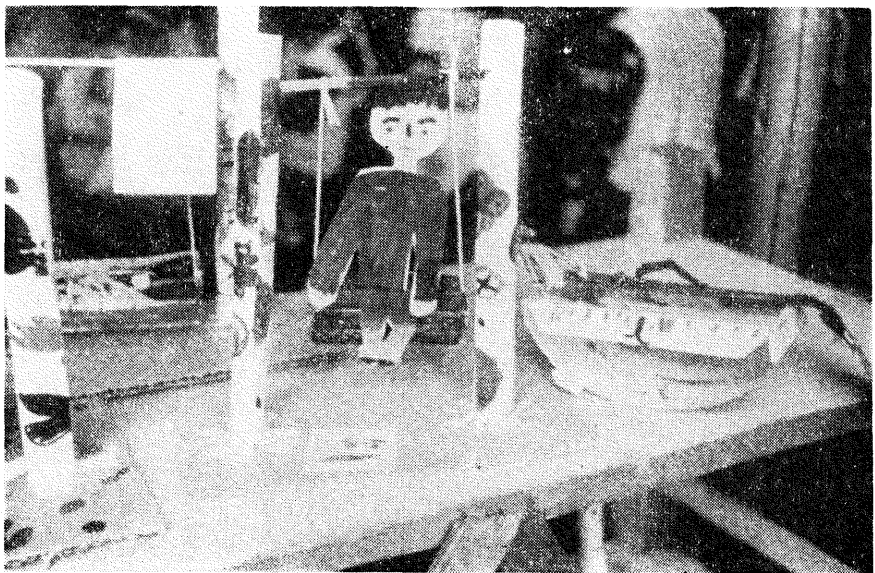
M「オレンジジュースじゃないよ」

⑰「でもオレンジジュースみたい」

⑱「こういうところがきいろなの。山手線なの」

⑲「わたしねえ、急行にのつたことあるわよ」

M「茶色ぬっちゃえばいいよ」







先生のおもちゃ屋さん

⑤ 「あかじゃだめ？」

M 「どうしてだよ」

⑥ 「これが茶色」

M 「窓までぬっちゃだめだよ」

⑦ 「その線のところまでね」

電車ができ上り、先生のところに持っていく。

先生はおもちゃを並べながら、⑧たちとはなしをしている。⑨たちはお金をつくったり、正札をつくったりする。おもいついた数字をかきならべるので、とても高い値段になる。

先生「雪であそびたいし、⑩ちゃんも、⑪ちゃんも、Aちゃんもやすみだし、おもちゃ屋さんどうする？」

と子どもたちとはなしている。

結局、庭で雪だるまをつくったり雪合戦をすることになり、おもちゃは一日延期して明日ひらくことになる。三人ずつ、他の組に行つて、「おもちゃやはあしたひらきます」といつてくる。

みんな外に出て、庭を走りまわったり、手でもちきれないほど大きい雪だるまをつくったり雪合戦をする。

二月二十六日 水曜日

おもちゃ開店の日

⑫と⑬がもうきている。

⑭ 「ね、はやく並べておこよう」

とおもちゃを並べかえたりする。

N 「いっとう」

と、保育室にとびこんでくる。

A、Hと子どもたちが次々に登園する。

先生が箱をもって入ってくる。

先生 「あ、おもちゃを並べて下さったのね。あら、きれいに並んでいること。同じおもちゃを同じところに並べるといいわね」

N たちは棚の下に身をかがめて、打ち合いをはじめ。本をよんだり、まりをついている子どももいる。先生にさそわれて、おもちゃの修理をはじめの子どももいる。おもちゃもきれいに並び、正札もついて、おもちゃの準備ができる。N たちはおもちゃの修理をしている。

先生 「遊戯室のお友だちも呼んできてちょうだい」

H 「先生、ぼくの飛行機に値段がついていない」

先生 「そう。机の上に値段の紙があるわ」

子どもたちはあちこちから保育室に帰ってくる。

先生 「まあ、よその組をおよびするんですけれどもみんなもほしいでしょう。じゃ先生がお店屋さんになりますから、どれかいいものひとつだけ買ってちょうだいな。きょうはとくべつお金がないわ」

先生がお店の口調で応待し、子どもたちはあつという間に買う。

先生 「みんなどんなもの買ったの」



おかねをわたす

子どもたちは高きさしあげる。今買ったばかりの首かざりをつけている子どももいる。

先生 「今度はみんながお店の人になるのね。じゃここにもあすこにもお店があるから、自分の行きたいところに行つてごらんなきい」

子どもたちは、とびはねるようにして売り場に行く。

先生はそれぞれの売り場にいた子どもを、ふたりずつ一組にして、他の組に「おもちゃや」がはじまることを知らせに行かせる。

いよいよ他の組の子どもたちがきて、おもちゃやがはじまる。先生はドアの近くに立って子どもたちの様子をみている。

子どもたち「さあ、いらっしやいらっしやい。これおもしろいよ」とびっくり箱売り場の子どもたちがいう。

㊦「そうだわ、ぶらんこをみんなで売らなくちゃ」と棚からぶらんこをおろして、お店の前の方に並べる。

㊧「ぶらんこどうですか」とゆらしてみせる。

㊨「こんなものもありますよ」とたんずをみせる。

みんな体をのり出して、売っている。それぞれの売り場がにぎやかになる。お客がくると自分にお金を払ってもらいたくて、みんながいつせいに手を出す。

5才児「おつり下さい」

㊩「おつりですか」とぎるからお金を出してわたす。

びっくり箱売り場では  
5才児「箱じゃない？ ただの」  
H「箱じゃない、見せてあげるよ」  
びっくり箱をあけて、中から人形の顔をだす。

5才児「なに、それもう一度やってよ」  
先生がとおりかかり  
先生「あはは、とび出しました」

6才児「それいくら」

H「百円にまけてあげてあげるから」

5才児「百円なんてないの。十円」

H「じゃ十円でいいよ」

先生はあちこちの売り場の子どもたちの様子をみている。

先生「㊫ちゃんあその売り場にかわって」

とあまり売れない売り場の子どもを売れる売り場につれて行く。

その後先生はこわれたおもちゃを修理する。一時間ほどにぎやかにおもちゃやがつづくが、おしまい頃にはおもちゃも少なくなっておもちゃとは関係のないはなしに夢中になっている子どももいる。

お客さんが全部帰ったあとみんな、きつと紙くずを片づけて子どもたちはテレビをみる。先生はその間に残ったおもちゃをきれいに並べる。

テレビがおわり。

先生「あのね、みんながいつしょうけんめい売って下さったけれど、あれだけ残ったの。もうひとつずつ買うだけあるわ」

と先生が店の人になりみんな買う。

先生「きょうはたくさんの方が買って下さっておもしろかったわね。おうちに帰って、きょうおもしろかったことをおうちの方たちにもおはなししてあげてね。みんな考えて、何かまたこんどしましょうね」